

欲しかったのは。

舟川笹

欲しかった。でももういらなないかもしれない。

---

中学生のころは、自分の欠点を発見する度に、なんとか直そうと努めていた。

高校生になると、周りの友人を見るにつけても、せわしない私とは対照的な真昼の雲の動きにも、地上のすべてのものに自分の欠点を見て、辛くて、でもなんとかしたくて、もがき苦しんだ。

でも、ある時気づいたのだ。誰かがこのままの私を認めてくれればいいって。

「そのままの紗耶でいればいい。」

そんな言葉を行ってくれる誰かが現れるかもしれない。そんな淡い期待。

そんな淡い期待が私を助けるのだから、柔らかな妄想にも意味があったのだろう。

高校時代はほろ苦い刺激の雨と、甘い妄想の雲でくすんでいる。

それからいくつもの歳月が過ぎ、昔はそんな悩みを打ち明けなかった私にも、何でも言える、わけではないけれども、それでも十分優しい恋人ができた。相変わらず自分の欠点を見つけて心の中で自分を嘲笑し、傷つく癖の抜けない私を、彼は私が言わずとも柔らかかに笑ってこう言うのだ。

「そのままの紗耶でいればいい。」

初めての言葉に、涙があふれた。それはもうずっと昔の話。

人は、甘い水だけでは生きてはいけない。甘ったるさに喉が渇く。水が、真水が欲しい。そういう望みを持ったのは、いつだったかしら。

ある日、私はいつも通り笑う彼に、マシュマロに刺す竹串のように、告げる。

「どうして、そのままでいいの。」

少し困惑した彼の顔。できれば即座にそのままだが好きだとか、変わってほしくないとか、言って欲しかったな。しかし、そんな風にかないことは、頭の片隅からじわじわと分かってきていた。彼は私が思いつめるのを心配していただけだったのだから。

結局は、私の弱さが彼の同情を買っただけ。そしてその弱さゆえに、こうも愛しい彼を傷つける。

「私は、このままではいけないと思う。...精神的に向上心のない者は、馬鹿なんだって。」ぶっきらぼうに告げて、目をそらす私は、どこかで彼に甘えているのだ。目からは塩水。甘い水のあとのしょっぱさは、より強く感じられる。

中和されて、真水になればいいのに。

私の頭を撫でる彼の掌を感じながら、私は自分の甘さを知る。

「紗耶が変わりたいのだったら、俺は応援する。」

なんだ、よっぽど彼の方が強いじゃないか。突き放された気持ちとともに、私の心は真水でいっぱいになった。

